
アンリマユ -世界を穿つ悪魔-

ヌメリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンリマユ ―世界を穿つ悪魔―

【Nコード】

N8416H

【作者名】

ヌメリ

【あらすじ】

全てはあの日から始まった。握り損ねた手。血塗られた惨劇のクリスマス。世界を平和へと導こうとする独裁者。一度狂ってしまった歯車は、止まることなく、狂ったまま回り続ける。これは、その歯車が――運命が狂ってしまった少年のひとつの物語である。

☆1（前書き）

始めまして。作者のヌメリと申します。

今回は『アンリマユ』を閲覧いただき、まことにありがとうございます。

これは自分の処女作になります。なので、文章が幼稚だったり、もっと工夫できたりといろいろなことがあると思います。読みに辛いところがあるかと思いますが、精進して頑張っていきたいと思います。

それでは、挨拶が長くなりましたが、アンリマユの世界をお楽しみください。
まずはプロローグからどうぞ。

☆1

今や世界は紛争で満ち溢れている。

エネルギー物質の急騰。

食料や水の不足。

人権や領土問題。

貧富の差。

強盗。

殺人。

強姦。

そして、部族や民族の違いによる互いの拒絶。

様々な原因がこの世界の人々を巻き込み、多くの命が失われた。

この争いの絶えない世界に終わりが来るのか。
争いのない平和な世界が訪れるのか。

それは誰にも分からない。

だからこそ皆、終わりを迎えるために戦場へと駆り出る。

だが、その理念がさらなる紛争を引き起こすことに誰も気付かな

い……。

いや、目先の勝利だけを考えるがあまり気付けないのだろう。

世界は混沌に包まれている……。



日本某所——

長い長い廊下を歩きわたった先に、極一部の人間しか入ることの出来ない部屋がある。

そこは暗い部屋、否、空間だった。

灯りが無い、というのではない。微量ではあるものの、証明の類は存在している。

しかし、それが自らの存在意義を主張しているかといえなさそうでもなかった。正確には、この空間に含有された闇の強さに負けている。

どれだけ強力な火を焚いても、千の蠟燭を灯しても、この闇は駆

逐できない。

陰ではないのだ。空間そのものが昏^{くら}い。そのような属性を、どのようにしてか獲得するに至った場。

すり鉢状の、コロッセオを思わせる広大な空間。無骨であるがどこかその造りは壮麗で、巨大な城の大ホールに見えなくもない。

そんな空間から音が聞こえる。音は一つ。ただ、いくつかの音が混じりに混じって、一つの音として耳に届く。
その中央には円卓。大きなホログラム装置。九つのディスプレイ。声はそこから発せられていた。

『——現在の状況はどうなっている？』

ザーザーとノイズが混じる。聞き取りづらい。

「現在予定よりも12%遅れで進行中です」

『12%だと？』

貴様らは何をしている。5%までに抑えさせろ』

「はっ！」

『……焦るでない。12%の遅れなど想定範囲内ではないか』

『そうも言っていられないさ。”約束の時”まで刻一刻と近づいている。多少の無理は致し方ないだろう』

『想定範囲内ならいいんじゃないですか？ 焦ってもいいことなんて無いですからねえ』

『確かにそうだ。だが、若い君と違って我等には時間がない。今は一分一秒でも惜しいのだよ』

『まあ早死にしない程度に頑張ってください。”約束の時”まであと少しですから、多少の無茶は覚悟しておかないと……』

五月蝿くなる会議室。

それを断ち切るかのように、一人の男の口を開いた。

『お喋りはそこまでだ、良い報せが入った。これで我等日本の存在が世界各国にとって大きな壁、絶対に越えられぬ壁となる』

がたりと席を倒し立ち上がる者がいれば、おおと歓喜の声をあげる者。大声で笑い出す者。

そして、その場にいた全員が手元にあつたグラスを手に取り

『我等が日本に、栄光あれ！』

『『『栄光あれ！！』』』

祝杯をあげた。

日本国民は知らない。

ここにいる人間のせいで自分たちの平穏な生活が音を起てて崩れ落ちることを……。

☆2—1

戦場——。

昔は草木が生い茂っていたであろうその場所は、すでに焼け野原とかし、辺りは人の焼け焦げた臭いがたちこめる。爆弾の爆撃音や銃声がそこたらじゅうから響く。

耳鳴りがする。耳栓をつけていても効果はなさそうだ。

そんな死臭たちこめる禍の地に、怒鳴り声。

「おい！補給部隊のチキンどもはまだ到着しないのか！？」

うろたえる数人の若人。帰ってきた返事は「まだ」の一言。目に涙を貯めながら、必死に訴えてくる。

「ち、中尉……。わ、私たちは、国から見捨てられ——」

「黙れ！お国が我々を見捨てるはずがない！我々は日本のために戦っているのだぞ！？見捨てられてたまるものか！！」

中尉と呼ばれる不精髭を生やした男は部下である若人の声を掻き消すように怒鳴り付けた。

部隊の空気は最悪で、これ以上は無理だと経験がいつている。

本部に増援をよこすよう連絡を入れたのは3日前。それから向こうからの連絡は一切何無く、いつ敵がまた攻めてくるかわからない恐怖と戦いながら精神と肉体を削り、過ごしていた。

部下である若者たちにも限界が来たようで、動揺が広がり、今にいたる。

「ち、中尉!! 今、緊急通信が…」

通信機をいじっていた男が血相を変えて走ってきた。彼の手には一枚の紙切れ。暗号通信。

「本部からだな、後続部隊はどうなった!?!」

「そ、それが……。」

補給部隊、ならびに支援部隊は敵軍の襲撃に遭遇、壊滅——、と」

「……く、くそつたれがあああ!!」

まだ支援・補給部隊が来るかもしれないと期待していた。支援部

隊が到着してこの絶望から自分たちを救ってくれるのだと信じていた。

その唯一の頼みの綱が今音をたてて切れた。

もう自分たちは国のために身体を張って死ぬしか残っていない。そう思ったとき――

「おいおい、しけたツラしてないでちゃんと前を見ろよ。じゃないと幸運の神様が過ぎ去っちまうぜ」

若い、本当に若い男の声がした。



言われたとおりに顔を上げれば、そこにはこの部隊で一番若い部下よりもさらに若そうな男がリュック片手に笑顔のまま直立不動。

クールというかなんというか、微妙に幼さが残っている。まだ未成年だろうと中尉は予想した。

重いため息を一つ。

それを見た若者はむっと顔をしかめ、ごそごそとリュックを漁り、中から一枚の便箋を取り出し、中尉に突き付ける。

”読め”ということだろう。渋々便箋を受け取る。

宛名や名前の無い便箋。裏に張られたシールを見た瞬間目玉が飛び出るかと思った。

便箋はただの手紙ではなかった。

もちろん無料のただということではないので要注意。

暗号通信でもなんでもないこれは、皇后様実筆の、戦闘許可書。

内容を簡単に言えば、皇后様直属の兵器・要人を寄こすから彼の指示に従い、速やかに勝利を収めよ。

この許可書は世界各国と結んだ条例に違反するほど強力な兵器、もしくは作戦を実行する場合にこれが必ず必要になってくる。つまり、この紙が書かれたということは、大量の死人が出ること。

しかし、この便箋を持ってきた少年は、大して凄いやつには見えない。

何か特殊な兵器の使い手なのか。そう思いたいが、少年の荷物は手にあるボロボロのリュックのみ。

皇后陛下は何を思ってこんなガキを戦場などに送り込んだのか理

解できなかった。

「さあゝて。後は俺が何とかするんで、皆さんはテキトーにくつろいでいいですよん♪」

軽い口調。笑顔に見えない笑顔。

なぜか背筋が冷たい。何か得体の知れないものを感じる。

「アンタは一体――」

なんなんだ？ 中尉がそう言うと、彼は目を丸くし

「そっか、自己紹介がまだだったね！」

リュックを地面に降ろし、握手を求めくる。

「私は草薙^{くさなぎ}。階級は中尉だ。この部隊――第弐七番隊善天草の隊長を勤めている」

「ヨロシク。」

俺は霞^{かすみ} 慎也^{しんや}。部隊は第最終番隊だよ」

「最終番隊……。」

そうか。貴様が噂の……。」

”第最終番隊”

彼らが出た戦は必ず勝利に終わるという凄まじい記録が残っている。それと同時に敵兵生存者数がゼロという驚異的な記録もある。それゆえ、悪魔の部隊とも呼ばれている。

——こんな少年があゝの悪魔？ 世の中ふざけてるな。
こんなガキが悪魔の称号を手に入れられるのならオレは神にでもな
んにでもなれる。

「さあて、仕事仕事♪

——ってそうだった！ 中尉さん」

突然の呼びかけに驚く。何と言うか、順応性が早い。
何だ？ と無愛想ながらも返事をする。

「早く帰りたいから中央突破しようと思うんだ。協力してよ」

——何を、言っているんだ？

やはりふざけている。頭の中がぐつぐつと沸騰していくのが自分でもわかる。

「こんなくだらないことちゃっちゃと終わらせてゆっくりしたいでしょ？」

「……貴様、ふざけてるのか？」

「いやいや。真面目すぎて面白いことしか思い浮かばない——」

気がつけば草薙は霞の胸倉を掴み、思い切りぶん殴ってやろうと拳を構えていた。

霞はそれを見ても眉一つ動かさない。冷たく、突き刺さるような視線で草薙を見ていた。

そして、彼はこう言った。

「じゃあ、死にたいのか？」

その一言に草薙は凍り付いた。

さっきまでとは声色が違う。違いすぎる。

まったくの別人と思わせるように、冷淡で嫌というほどはつきりと聞こえる。

ふざけた印象は感じとれないし、なにより、怯えている自分がない。

「今の状況は、悪化することはあっても良くなることはない。俺の予測だと、あと八時間もすればここは完全に制圧される」

草薙も同じことを思っていた。

支援部隊が来ていればもう少し保っただろう。それでも、負けることに変わりなかった。

だが、目の前の少年は勝つ気にいる。
戦力差のはっきりとしたこの戦いに。

「死にたくない、早く家族に会いたって本気で思ってる奴は俺に従え。やる気のない屑はここで滅べ」

☆2-2

会議室代わりに使用していたテントの中には、霞を除いて六人の男がいた。全員、先程の霞の話を聞き、生きたい、早く帰りたい、と願った者たちだ。

「これだけ集まれば十分だ。集まってくれた方々、感謝します」

霞は深々と頭を下げる。男たちはそれに敬礼で答える。

彼らの瞳には一つの炎が灯っていた。”生きたい” 帰りたい” 家族に会いたい”。

様々な想いがあるだろう。だから、彼らをこんなところで死なせてはならない。

ここにいない腐った連中はいくらでも死んでくれていい。でも、彼らのような勇敢な者たちには、生き残ってほしい。家族に会ってほしい。幸せになってほしい。

「では、今から説明する通りに動き、行動して下さい。突入などのタイミングは各自の判断にまかせます。

決行日時は今から6時間後。それまでにしっかりと準備をしておいて下さい」

全員が霞の説明を真剣に聞き、地図を食い入るように見ていた。誰もが少しでも生き残る確率を上げるため、必死だった。

ああ。絶対死なせるものか……。

霞はそつと心の中で誓った。



説明を終え、外に出て、敵陣のあるほうへと目を向ける。そこには大型のトラックが数台停車していた。

何をしているのか詳しくはわからないが、ミサイルや弾薬、食料や薬などの補給物資を運び込んでいるのだろう。

「これはチャンスだね」

今なら物資の運び出しでこたごたしているだろうし、そのせいで満足に動けないだろう。

暗かった道に、光が差し込んだように霞には思えた。

絶好の好機。これを逃しては疲れきっている我らは敵に勝つことは出来ないだろう。

「計画予定時間を早め、3時間後には事を起こします。大変だと思いますが急いで準備して下さい」

「はっ！」

皆が準備をしている間、自分もやることをやってしまおう。

自分のテントに入り込み、背負ってきたリュックをがさがと漁る。中からいくつかのパーツを取り出し、地面に丁寧に並べていく。

この光景を見た人が、お店でもやるのではないかと思うほどの種類と数。形やサイズは様々で、ピンからキリまでなんでもそろっているように思える。

「今回はどいつで突っ込もうかなあ……」

顎に左手を当て、右手でどれにしようかなー、と部品ひとつひとつに指をさしていく。悩んだ末に選んだのは、霞の腕ほどもある長い銃身だった。

「ちょうどいい機会だし、試してみようかな」

そう言って、銃身をペロツ、っと舐め、

「怖がらなくていいよ。さあ、俺のなかへお入り」

身体の中へと消えていった。



作戦が説明されてから3時間が経過しようとしている。作戦開始時間まで残りわずか。

晴天を覆う厚い曇。所々の隙間から陽光が差し込んでいるため、暗い中にも明るく照らし出されているポイントがいくつか存在している。中途半端だが、雨が降って視界が悪くなるよりは全然マシだ。

草薙の仕事はここを本部として、各隊員に指示を与えるという単

純なもの。責任は重大だがやりがいのある仕事だ。

作戦内容も目を見張るような大胆かつ、繊細なものだし、なにより霞という人格にちよつとした興味を草薙は持っていた。

草薙の目の前には霞がいて、無線機を使って別働隊と連絡を取り合っている。細かい指示を、ひとつひとつ丁寧に教えているその姿は学生が授業の内容を友達に教えているような、そんな年齢を感じさせる光景だった。

ピピピピ、とアラートが鳴り響く。瞬間、辺りの空気がより緊迫したものへと移行する。

「時間です。では、始めましょうか」

そう言うなり霞は無線機の電源を切り、自分の身体を抱くように腕を胸の前で交差した。そして、背中にグッと力を入れる。

メリメリッ、と不気味で面妖な音をたて、彼の皮膚を突き破って生えてくるものがあった。

羽。

背に広がるのは二対二組の主翼と補助翼だ。長さ一メートル半は

下らない主翼が広がり、フラップが上下する。その奥には翼内式のスラスターがある。

ふう、と吐息を漏らし、呼吸を整えた後。もう一度無線の電源を入れ、

「それでは行きます。あとは手筈通りに。みなさん、必ず生きて帰りましょう」



その言葉が作戦開始の合図となった。

霞は大地を蹴ると同時に背中のスラスターを吹かし、敵陣へと跳んだ。

完全に空を飛ぶということはせず、地面すれすれを低空飛行。対空火砲の的にならないためには低空飛行で飛ぶのが一番いい。

ここから敵陣中央まで約十二キロ。
自分のスピードなら三分あれば着くだろう。と霞は予測した。

途中、背後からは爆音が響く。知らないうちにいくつか地雷を踏んでいたらしい。誰もいない平地で虚しく爆音が響いている。

向こうは向こうでようやくこの異変に気づいたのか、半分ほど進んだ所で遅すぎる熱烈な砲弾での歓迎会。打ち出される弾の数は一秒間に約二百。しかし、そのどれもが霞の速さに付いていくことが出来ず、後方で着弾、爆発していく。

敵陣中央まで残り八キロ。

今頃向こうは警報のサイレンが鳴り、敵^霞がすぐそこまで来ていることを知らせているだろう。

「……トロいなあ」

右手に意識を集中。メキメキと面妖な音を起て、右手がその姿を変えていく。

出来上がったのは長い銃身だった。それは、作戦開始前に霞が丸呑みしたあのパーツとよく形が似ていた。

霞はその長い銃身に電気を走らせ、射出。電気エネルギーを磁器圧力に変換し、光速に近い速さで射出された弾丸は、いともたやすく鉄鋼を貫く。

——レールガン。

連発は出来ないが、十分な破壊力を持つそれは、ここで使うには勿体ない気がした。



残り四キロとなると流石に守りが堅くなっていた。

足を止めれば鉄鋼弾の雨。痛いじゃ済まされないだろうなあなんて当たり前のことを考える。

怖いとは思わなかった。
でも楽しいとは思った。

今の状況を楽しんでいる自分に嫌気がさす。でも楽しくて、面白くて、もっと暴れたいと思った。

砲撃が地面をえぐり、砂埃をたてる。それが煙幕の代わりとなり、霞の身を隠す。

(……これは)

何かくる。そう思った瞬間、霞の腕を数発の銃弾が擦過する。

弾が飛んできた方向に目を向けると、砂煙の向こうから微かに数人のメカメカしい甲冑を着込んだ男たちが見えた。

S F A (S p e c i a l F o r c e A r m o r)。

別名…特殊強行用装甲と呼ばれたそれは、20mm重機以下に対する完璧に近い防御力を有する特殊装甲と、推力付与による高機動性、機械動作による物理的破壊力、豊富かつ容易な武装換装能力といった優れた性能を誇る。向こうの主戦力とも言える兵器。

今では戦車よりもこういった小回りのきく兵器のほうがよっぽど使い勝手がよい上に成果も多い。

「お手並み拝見、といきますかな」

時間はまだある。悪いとは思いつつも、霞は内なる欲望に耐えられない。

——コイツらと闘ってみたい。

砂煙をを抜け出し、S F Aとの戦闘を始めた。

☆2—3

霞は左手に機関銃、右手はレールガン、腰にはブレードを一つずつ備えている。

一直線に敵SFAへと直進。

次の瞬間、無数の砲撃が霞の眼前を通過。額を掠める。着弾音が爆ぜたと同時。レールガンを砲台に向けぶっ放す。

次に、そこら辺で拾った機関銃を構え、体を回し、連射撃。火薬の音に、SFA部隊は、慌てて盾や小手を構える。

——遅い。

金属音とともに彼らの体が下がり、または吹き飛ばされる。

青白い煙が自分を包んでいる。周囲の布陣はわずかに広がり、敵SFAの男が一人、血を流して倒れている。彼からはピクリとも動く気配は感じられなかった。

何らかの攻撃を受けていたらしく、右袖が裂けていることに気づく。完全に避けたつもりでいた。しかし、予測に反して自分は傷ついていた。

——だから面白い。

霞は銃口を目の前の地面に着けた。銃口が動き、その先端が土の地面に孤を描いていく。

「骨には鉛を、肉には鎖を、血には油を――」

銃口が上がる。

「生ける者には死を」

告げるなり、霞は並ぶ敵に向かって引き金を絞った。



霞は、前から飛び込んでくる隊長と思われる男に対して左肩から飛び込んだ。距離を一瞬で詰める。

男はこちらに長銃を向けた。向かう霞は、機関銃をわずかに上げ、動く。

己の機関銃を敵の銃身に叩きつける。

そのまま霞は男の長銃を下へと押さえつけ、前へ。走る右足で地面を踏み、次の足で下がってきた長銃の銃身を踏みつけた。男の長銃、その先端が地面に対して斜めに刺さる。

霞は左腕の機関銃を杖のようにつき、前へ。

機関銃を地面に突き立て手から離す。そして男の長銃を踏んだ左足を1ステップに、次の右足を振り上げ、長銃を昇る。

振り上げた右足はそのまま蹴りに。狙いは男の顔面。一直線の速い蹴りを装甲の隙間に叩き込む。

判断は一瞬。

男が長銃を離す。彼は長銃のストラップだけを手に残し、背後へと跳躍。

男は下がりながらストラップを強く引いた。地面に突き刺さるような形で残っていた長銃が、蹴り途中の霞を上に乗せたまま強く引かれる。

わずかな反動。それとともに長銃が地面から引っこ抜かれた。

「ちっ」

長銃に左の軸足を掛けていた霞の身体が、足下をすくわれて後ろへとひっくり返る。

彼はそれでも引かれていく長銃を蹴りつけ、高く背後の空へと跳ぶ。

——だが遅い。

もう既に、男はストラップに引かれて戻った長銃を手にホールド。宙を転ぶ霞へと照準を設定した。

引き金を絞ろうとしたそのとき、霞の身体が宙で縮まり、小さく一回転した。

後ろへと、宙にしゃがみ込むような姿勢をとった霞の、その足下を支えるものがある。先程彼が、杖のように地面へ突き刺した己の機関銃だ。

天に向かって突き立つ銃床の上に、霞は右の足をついた。直後、身を伸ばして跳躍する。足の下を男の長銃から生まれた光弾が抜く。

霞は跳ぶ。

側転を一度いれ、男の背後へと着地した。

男が背後の霞に盾を向けるのと、男に背を向けた姿勢の霞が、何かを投げるのは同時。脇を抜き、手首の動きだけで投げられたのは、丸い大きな影。

対する男は反射神経の動きで盾を振り、宙を飛んできたものを横薙に払った。

重いが、しかし柔らかい音がして、盾に一つの物体が弾かれる。

男はそのまま身を回し、長銃を霞に向けようとする。

そのとき、男は自分に投げられたものの正体を確認した。

味方兵の生首。

「……な、に」

呆然とする声を前に、霞が立ち上がる。身体は既に男へと。左腕を武器へと変形。視線は男のがら空きになった胴体の中央部へと。

左腕が変化を終える。散弾銃。

霞は一度銃身を前に振り、その反動でコッキング。戻す反動で引き金を絞った。

弾丸はまず、男と霞の中央に飛んでいた生首を破碎。直後に男の胸当てに直撃し、男は後ろへと吹き飛んだ。



主戦力をやられ、怖じけづいたのか敵兵が霞に背を向けて逃げていく。

それを霞は無様だなどとは思わない。懸命な判断だと思う。ほとんどの人は霞の存在を知らないまま消えていく。彼のことを知っていたとしても結果は同じだ。

「……ふう」

ようやく一息つける。張っていた肩を下ろし深呼吸。

と、無線に反応あり。

『こちら草薙だ。貴様に言われた通り、本部を押さえることに成功した。』

通信内容は霞の予想した通りのものとなった。

作戦は成功。あとは、掃除だ。ここら一帯を綺麗にしなくてはならない。

「分かりました。後はこちらで片付けますので、離れてください」

『分かった。……幸運を祈る』



——十分後。

草薙たちは霞に背を向け、車を走らせていた。

荷台には彼の部下が数人病気で臥せっているように顔面蒼白にして倒れこむように座っている。緊張によって抑えられていた疲労感がいつきに襲ってきたのだろう。

突如、背後から爆撃音とともに衝撃波。

草薙は宙に浮かぶ霞を見た。そして呟いた。

「——化け物が」

草薙は生涯忘れないだろう。

夕日が沈むというのに未だに明るい空には、はっきりと月が空に浮いているのがわかる。月と霞が重なったそのとき、草薙には彼が天から舞い降りてきた使者のように見えた。口は歪な三日月、眼は悪魔の如く鋭い。しかも身体は機械。そんな歪な三拍子がそろった悪魔。

——こんな化け物を忘れると言うほうが無理だ。

●

その後、霞が去った戦場は、昔の落ち着きを取り戻した。
草木が生い茂る穏やかな土地は、枯れはてた荒野のような”何も
ない”土地になってしまった。

☆3-1(前書き)

視点が変わります。
ここからが本編なので。

☆3—1

日本でもあまり目立たない街、T県。

そびえ立つ高層ビルディングが煌めき、容赦なくその反射光が己が身へと降りかかってくる今日この頃。混雑する道路。遊ぶ子供のいない公園。歪んで見える視界。

人影などあまりない。この日の気温があまりにも夏を思わせすぎるからだ。暦の上では10月に入ったはずなのだが、この日はどうしようもないほど暑かった。

「はっ、はっ、はっ！」

時刻は9時に10分前。

その暑い日差しを抜けるようにして、誰もいない道を必死に走る少年が1人。

家から全速力でここまで走ってきた彼の名前は赤坂^{あかさか} 秀二^{しゅうじ}。
普通科の高校に通う2年生。

真っ白な髪に整った顔立ち。カラダは少しひよろつとした感じだが、目つきが鋭くクールという印象が強いため頼りないとは思わせない。

そんな彼がこうして走っている理由はただ1つ。

「ちくしょー！　なんで目覚ましが止まってんだよ！」

秀二は朝に弱い。昨夜セットしておいた目覚まし時計はそれは綺麗に解除されていた。

それを母親に聞いたところ、目覚ましは鳴ると同時に眠ったまま立ち上がり、目覚ましを解除した後にもまた寝るのだとか。白目をむき出しにしたまま目覚ましを解除する姿はそれはそれは圧巻だったそう。

「なんで朝なんかくるんだよ！？　もうやだ、朝なんてだいつきらいだ！」

大自然にいちやもんつけても何にもならないことくらい彼は理解している、さすがにそれほど秀二はバカではない。

「何やってんだよ秀二。　早くしないと遅刻だぞー」

と、そんな秀二を横目に、自転車に乗りながらニヤニヤしている青色の髪をしたへんた——もとい男が通り過ぎた。

彼は高嶺^{たかみね}傑^{すぐる}。黙っていればいい男な彼は秀二の悪友の1人だ。傑の通称は『ワカメ』。由来は髪型がワカメのようになびいているから。あとヘタレだから。

これがまた違和感なくぴったりフィットするあだ名だから面白い。

しかし、本人はこの呼び名を嫌っている。

「ハッ、ハッ、傑！ て、てめえ……！！！」

自転車のハンドルを掴もうと手を伸ばす。傑はひよいとそれを回避し、

「あははは！」

朝から秀二のこんな顔が見れるとはねえ。 あ、俺は先に行くから頑張って走ってね♪」

高らかに笑い、自転車のスピードを上げた。

傑の自転車はそこらのママチャリなんかとはワケが違う。決して、ママチャリをバカにしているのではない。

傑の自転車は競輪などで使用するトラックレーサー（ブレーキ付き）なのだ。シンプルな構造をしつつも、これでかなりの速度が出せる。

あっという間にどれだけ走っても追いつけない距離まで離されると、

「1限は物理だからな……！！！」

叫ぶ傑。それを汗だくで後ろから見守る秀二。

「あゝ、物理か。 荒井センセ厳しいからなあ。 きつと補習とかプリントがたんまり……」

そんなことを考えると頭が痛くなってくる。

時計を見れば授業が始まるまで、残り3分もなかった。

「学校着いたら1発殴っとくか……」

秀二は走るのを止め、はぁ とため息をつき、歩きだす。

途中、交差点にさしかかり、足止めを食らう。その交差点はなかなか信号が変わらないことで知られている変わらない交差点で、歩道橋の類は一切ついていない。

まあいいか、と嘆息し、秀二は焦る素振り1つ見せずにマイペースで歩いた。



学校に着いたころには1時間目はすでに終わりを迎えようとしており、少々時間を潰しすぎたなと秀二は反省。

チャイムが鳴り、先生が教室から出てきたのを見計らって、入れ替わりで室内へ入る。

「ウッス」

いつものように軽くクラスメイトたちに挨拶を済ませ自分の席へ。カバンの中身を取り出していると傑が秀二の机の上にどかつ、と腰を下ろし――

「いよお秀二、遅かったじゃないか。一体何して――おぶちお！？」

ニヤニヤしていた傑を思い切り平手でひっぱく。しかし、このイライラは治まることを知らなかった。

勢いにのつてもう数発平手をくらわす。もちろん全部手加減なし。

トマトのように真っ赤に腫れあがった傑を抱え、ゴミ箱にダンク。暴れるのを無理矢理押し込んで蓋を閉め、ガムテープでぐるぐる巻きに固定した後、それを階段から勢いよく転がし、放置する。

傑の悪行が秀二の胸の内でグルグルと未だに渦巻いている。

正直、傑にかまってる時間も勿体ない、というか6畳間の畳の目を全て数えるほど無意味だ。

秀二は全てを（傑の存在ごと）忘れたかった。だが、イライラしすぎて逆に脳に印象深く刻まれてしまっている。このままでは今日は厄日になってしまう。人生は長いとはいえ貴重な1日だ。何かいいことはないだろうか？

ちよつとだけ真面目に秀二が考えていると、目の前に1人の女の子が腕を組み仁王立ちして立っているのに気づいた。

すらつとした上半身 and 下半身。赤に近い色をした長い髪をこれた赤のリボンでひとくくりになっている。ポニーテールというやつだ。細い輪郭は彼女の可愛い顔をより可愛らしく、綺麗に見せる。

彼女の名前は茅崎^{ちさきりん} 凜。

幼なじみであり、クラスメイトであり、クラス委員長でもあり、さらには運動神経はバツグンで、成績は学年トップ。

その気品ある態度と文句のつけようのない容姿で男子生徒たちからは我が校始まって以来の学園アイドルともてはやされるも、それをおごることもなく、友達付き合いもよい。

そんなまさに完璧と言っているほど人間離れた彼女は天使のような甘い表情で秀二に向かって微笑みかけ――

「あんたバカア？ 今日で遅刻何回目だと思ってんのよ。なんで遅刻したのか理由を20文字以内で述べよバカ」

「ねぼ「ただし寝坊以外で！」

と、いきなり罵声を浴びせてくれた。

クラスの連中はこの罵声を無視、もしくは、いつものことか、と言って欠伸をしている。

そう。これは秀二にとってはいつものことなのだ。

昔からつるんできたせいか、秀二と傑に対する態度が周りとは雲泥の差なのだ。もっとも、それを知っているのはクラスの連中だけで、他は誰も知らない。

これは、傑曰く――

『あいつはツンデレなんだよ。もしくは、ツンドラ？ もう視線がツンドラ気候並みに冷たい……』

だそうだ。

それに秀二は凜が『デレた』ところを見たことがない。それも含めてツンドラなのだろう。

「何か言った？」

「いいえ、何も言ってませんわ」

「ふーん。どうせまたツンデレだとか何だとかくだらないこと思ってるんでしょ」

くそ。本当にこういうときは勘が鋭い。

秀二はそれを顔に出すことなく、あくまで冷静に、そして笑顔で

「いやいや、そんなこと微塵も思っ——あ、その関節は、だめ……アツ——！！」

外された右手首の関節の痛みに悶える秀二。

それを凜は含み笑いで一掃した後、自分の席へと戻っていった。

☆3—2

それから授業は退屈なものであり、大変なものだった。なにせ手首がものすごく痛いのだ。それも利き手の手首が。シャープペンをルを持つことすらままならない。

どんだけ痛めつけてくれるんだよ、と悪態をつくが、教室の温度が一気に2、3度下がったような感覚に襲われたため、自重する。

ノートをとることも面倒な秀二は、襲ってきた眠気に逆らわず机に突っ伏する。

……午後はサボろうかな。

こんなつまらないことをしている時間があるのなら、別のことをして有意義に過ごすほうがいいのではないだろうか。そんなことを考えていると、つんつん、と背中を何か尖った物で突かれる感触があった。

「おい、秀二秀二」

傑だ。

先生にバレないようにお互い小声で話し合う。

「何の用だ海藻。俺は眠いんだ」

「この授業が終わったなら食堂に飯でも食いに行こうぜ！　って誘うつもりだったんだがな。そうか眠いのか君は……。授業中に昼寝とは……。ついに君も僕と同類になる決意をしたんだね♪」

ザクツと秀二の心に99999のダメージ。もうやめて！　秀二のHPは－65483よ！！、とか誰か言ってくれないかなあなんて思ってみる。

ポーカーフェイスを装っているが、秀二の心は傷ついている。凄く傷ついている。

こんな人生棒に振ったような男と同類なんてありえない。むしろ死ぬる？

とにかくショックだ、すごいショックだ。精神的ダメージがあまりにも大きい。そんなことにも気付かず、あっけらかんと喋ってくるこいつが憎い。

音が出ないように静かに傑を殴り、壁にかけられた時計を秀二は見た。

12時30分。あと5分もすれば終業のベルが鳴り、昼休みに入る。

「じゃあなしだな。付き合ってやらなくもない」

「ふおうこなくっひゃ♪　ひゃあ、ひゅぎょう終わっひやらダッヒ

ユふあ」

「ああ、了解した」

頬を腫らし宇宙語を流暢に話す傑との約束を取り付け、静かに授業が終わるのを待った。



ベルが鳴り授業が終わると、クラスの人たちは思い思いの時間を過ごす。机をくっつけて弁当を食べる者。板書を必死にノートに写す者。お喋りをして楽しむ者。

そんな彼らを教室に残し、秀二と傑は廊下を早足で歩いていた。

「くそっ！ 出遅れちゃった！ これじゃあ空いてる席がないかもしれないな」

我が校には購買もあるのだが、基本的には食堂のほうが賑わっている。安く、量が多く、味付けが薄いので腹は手軽に膨れる、という点に生徒を群がらせる秘訣があるのだろう。

そのせいか、早めに席を確保しておかなければ立って食事をとらなければならなくなる。以前何度か秀二はそうやってお昼を食べたが、味噌汁をこぼしかけたり、茶碗をひっくり返しそうになったりした。

「急ぐぞ海藻。お前の唯一凡人と同じ能力、『走る』を俺に見せてくれ」

「おうよ！ 僕の華麗なる足運びをとくと見よ！」

自分がバカにされていることなど他人事のように華麗にスルーして走り出す傑。バカにされたことを気づいてないだけかもしれないが、それでも秀二は傑に足蹴にされたような気がしてムツとしていた。

食堂まであと少し。そんな時、見知った顔がこちらに向かって歩いていた。

「秀二とワカメじゃん。今日は食堂か？」

気軽に声をかけてきたのは、クラスメイトの後藤ごとう敦あつし。秀二や傑の小学生からの友人で、武術を少しやっているらしい。

”らしい”というのは本人はそのことに関してあまりに口にしたがらない。ただ、近くの武道館に通っているところを何度か目撃さ

れているため、何かやっているという噂が広まったのだ。

「後藤。よく聞こえなかったから、もう一度言ってくれないか？」

傑が苛立ち気に言い放つ。傍目から見てわかるようにイライラしている。

「ん？ 『今日は食堂か？』 ってどこか？」

「違う、誰がワカメか！ 秀二、後藤に俺のことを教えてやってくれ！」

「ワカメだ。近くのスーパーで『増える傑ちゃん』として一束二百円くらいで売られている安物ワカメだ」

「裏切り者！！」

「裏切りとは人聞きの悪い……。話せと言ったから正直に話したままでだ」

「そういうところがムカつくんだよ！ チクシヨオオ！！」

嘆く傑を残して、秀二は一人で食堂へと歩を進めた。

「あいつのせいで時間くったからな。人でいっぱいじゃないといいけど……」



食堂に着いたら、第1に席の確保。第2に食券を購入しなくてはならない。

席は今から確保というのは難しいだろう。そう考えた秀二は食券を先に購入するため券売機へと向かう。ちなみに、この学校には券売機は1台しかなく、タイミングが悪ければ行列がその前に出来ている。

大丈夫かな、と心配しながら最後の角を曲がると……案の定、人でごった返していた。見回す限り人、人、人。券売機には長行列ができているし、座れるような席は見当たらない。

「座る席ないなあ……。ワカメを椅子代わりにすればなんとかなりそうだが」

その肝心の傑を置いてきてしまった。まあいいけど。

「なに物騒なこと言ってんだよしゅう——へぶっ!？」

後ろから突然聞こえる傑の声。びっくりして思わず裏拳をかましてしまった。

豪快に吹っ飛ばす傑。

秀二は、悪い♪ とペロちゃんばりの舌だし表情で平謝り。

「で、どっからわいてきたんだ？」

「俺は虫じゃねえ!!」

傑は頬を押さえながら必死に自分の言い分を訴える。

「そう君は虫ではない。ワカメだ」

「ワカメ言うなやああ!!」

「ワカメにワカメと言って何が悪い。お前もいい加減認めたらどうだ？」

「冷静に返すな！ そのキャラがムカつくんだよ、チクシヨオオ！」

「その台詞聞き飽きた。 もう一回やり直し」

「お前何様だよ！！」

「それは君が知るべきことではないよワカメ君」

「ち、チクシ——ぐべらあ！？」

鳩尾を殴られた傑は悶絶してその場にうずくまった。

☆3—3

今日の定食は鳥の竜田揚げだった。

香ばしい肉の匂い。カリッと揚げられた衣は、一度噛むとサクサクと景気のいい音を鳴らしてくれる。衣の奥には柔らかい肉がこれでもかというほど詰め込まれ、ジューシーな肉汁が溢れ、口の中を瞬く間に蹂躪する。

「美味いっ」

ふと横に目をやる。そこにはまだお腹をかばうようにしてうずくまっている傑がいる。

ほおっておいても大丈夫、と理由もなく確信した秀二は1口1口を大事に味わいながら定食をたいらげ、食堂を出た。

教室に戻ってきてみると誰もいなかった。

机の上には着替えられた制服が放置されている。

次の授業が体育だったことを秀二は思い出し、カバンの中から体育服を取り出し、体育館の近くにあるロッカールームへと向かう。

この学校では、生徒1人1人にロッカーが割り当てられており、体育や部活動をする時は原則として、そのロッカーの中に荷物や着替えを入れる。

盗難防止のための策なのとか。

しかし、その割には鍵は個人で用意しろといういいかげんなところもあり、面倒くさがる生徒が多発。秀二のクラスの男子でロッカーに鍵をかけているのは3割にも満たない。

時計を見ると授業が始まるまで5分となかった。

体育の先生は厳しい。少し遅れただけでもしばき倒されてしまう。そんなのは御免だ。

今なら急いで着替えればギリギリ間に合うだろう。

秀二は着替えを抱えたまま、猛ダッシュ。その途中で食堂帰りの傑と遭遇した。

「お腹すいたよ秀二くん」

どうやら結局何も食べられなかったようだ。ざまあみろ、と心の中で秀二は笑った。表情に出さないのはせめてもの情けだ。

「で、なんでそんなに急いでんだ？」

相変わらずの脳天気ぶりを発揮してくれる傑。こいつは次の授業が何か分かっているように、頭の上にクエスチョンマークを浮かべている。

「次は移動授業だからな。早くしないと遅れるぞヘタレワカメ」

優しく、親切に教えてあげる秀二。

こんなにも傑に対して優しい対応をしたのは初めてではないか？と秀二自身も驚いたほど、今の台詞は気が利いたものだった。

「秀二、とりあえずこれだけは言わせてくれ。お前は鏡で自分の顔を見たことがあるか？」

秀二の心を見透かしたように、意味深なように特に意味のない問い掛けをする傑。

もちろんあるとも。鏡くらい毎日見る。顔を洗ったり、髪型をチェックする時には必需品ではないか。

だが、今の会話の中に関係することだろうか？
まあいいか。どうせ傑の戯言だろうと、気にしないことにした。

「OK。移動授業だったな。

……次の授業は確か物理実験かな？」

未だに時間割を覚えていないその鳥頭に賞賛の言葉を送ろう。『
どうもありがとう』と。

(……ワカメよ。君との思い出は忘れないよ)

心の中で十字を切り、無神論者でありながら神に祈った秀二は体育館に向かって全力で走った。



「シュートオー!!」

かっこよく(?)シュートうつ傑。もちろんゴールポストにも当たらず、明後日の方向へとボールは無様に飛んでいく。

「あちゃー、失敗失敗。ま、人間こんな時もあるさ!」

「お前は失敗しかしたことがないだろうが」

彼の頭の上には目に見えるほど大きなタンコブができている。定番の筋肉ムキムキ体育の先生が傑に制裁を与えたのだ。

秀二たちがいるCクラスは隣のDクラスと合同で体育の授業を受けている。

なので、対戦相手はDクラス。20人対20人の度肝を抜くようなプレーのない健全なゲームである。

「秀二、パスだ！」

後藤からボールがまわってきた。それを受け取り、誰にパスを回そうか考えるために周りを見ると、傑が手を振っている。もちろん女子に。

「秀二！　僕がキメてやるからそれを寄越すんだ！！」

女子にかっこいいところを見せたいのか地球が滅亡してしまうくらいありえないことを口走る傑。

それにカチンときた秀二は、

「分かった。これきめれなかったら罰ゲーム」

そう言って傑にロングパス。わざと悪いコースに蹴り飛ばした。真の男たるもの、これくらいは楽勝にこなす。……たぶん。

「秀二、このコースは絶対わざとだろ!？」

「グダグタ言っていないできめに行け」

「むおおおお!」

叫びながらジャンプ。空中でトラップしたボールを不安定な体勢になりながらも受け取る。当然身体の向きはゴールへと。

傑とゴールまでの距離は約10メートル。シュートを打てば入るかもしれない。しかし、それはあくまで可能性の話。今は”絶対入る”という確信が欲しい。

そうするためにはどうすればいいか。簡単だ。至近距離で打てばいいのだ。

思考が単純な傑はそれをすぐに行動に移した。

シュートを打つフリをしてそのまま前進。何人かが釣られて動きを止めたが、釣られなかった3人が迫ってくる。

前から2人。後ろからは1人。

傑は走った。

後ろのやつは無視。走れば次第に距離が開く。問題は前で構える2人だ。

「高嶺、ここは通さんぜよ!」

「……抜かせんっ」

迫る2人は勢いを緩めない。このままの速度だと衝突する恐れがある。にも関わらず、彼らは妥協も、諦めもしない。傑からボールを盗るという意思のみで動いている。

そんな彼らを出し抜くには――

「これだああああ！」

やけくそ気味にゴールへとボールを放つ。

空へと旅立ったボールは綺麗な弧の軌跡を描き、

「秀二の、バカヤロウ！　ちくしょうがあああああ！」

ボールは微妙にカーブし、飛びついたキーパーの左手をかすめ、ゴール内にキレイに収まった。

☆3—4

「ヨッシャアアア！！」

シュートを決め、サッカー選手のように、ゴール付近を雄叫びをあげながら走り回る傑。

「チッ」

ソレにイラつときて舌打ちをする秀二。

「これで罰ゲームはないな！」

ニコニコしながらスキップで秀二に近づく傑。
なぜだろう。特に思うことなど何も無いというのに、いつの間にか拳が固く握られている。

「ああ。それにしても、なかなかいいシュートだったぞ」

「まあね。秀二のパスがどんなにへボくても、僕がいればそれが得点になるんだ。アシストお疲れ！」

——アア、コイツヲコノ手デ亡キ者ニシテシマイタイ。
ここは我慢である。貯めて貯めて貯めて貯めて貯めて——

「いやいや、あの胸トラップは見るも無残な汚らしい体制だったが、ソコから放たれたシュートはしなやかだった。そう、まるで波に揺られる海藻のように、な」

一気に爆発させる。

言葉攻めの一網打尽。精神の隅々までボッコボコにしてやる。

「海藻じゃねえって何回言えばわかるんだよッ!？」

怒るところソコなんだ、と秀二はテキトーに思考する。

傑はいじけて体育座りをして地面に絵を描き始めた。無様である。

「まあそう拗ね——ッ!？」

秀二は憐れな傑をもう一度持ち上げて地に叩き落とすという悪魔のようなことをしようと肩をポンと叩こうとした。しかし、突然秀二の胸のあたりに激痛がはしり、痛む所を押さえて苦しむ。
今まで経験したことのない激しい痛みで思わず顔を歪める。

「ん、どうした？」

傑が不機嫌な表情のまま秀二の顔を覗く。彼にしては珍しく心配してくれているようだ。

「……いや、なんでもない。ちょっと眩暈がしたただけだ」

「あんだよ貧血かよ。先生には言っというてやるから休んでこいよ」

「ああ。すまん」

秀二は心の中でソツと傑に感謝しよろよろと歩く。
フラフラな足取り。石につまづけば間違いないと転んでしまう。それくらい弱い背中。

無事に校舎裏にたどり着いた彼は誰の目にも止まらず、倒れるようにして座り込んだ。

断続的にしか呼吸ができず、肺が常に酸素を欲する。
胸には鋭い痛みを感じる。服を見れば、痛むところが赤く染まっていた。

サッカー中にケガでもしたか？

だが、トラップした記憶も転んだ記憶もない。

それに、この痛みは外側ではなく内側から感じられる。

何か悪い病気にでもなったか。心配になり服を脱いで赤く染まっている箇所を確認する。

見てびっくり。朱く染まった血管のようなものが秀二の胸を中心にして体全体に伸びていた。

もちろん、血管はこんなにも大きく、はっきりと見えるものではない。例えるなら”ひび”。皮膚の下にある肉がひび割れを起こしている。

こんなモノ、体育をする前にはなかった。

新手の病原菌か？ウイルスか？毒か？

不安が募る。だんだん怖くなってきた。

よく見ると”ひび”の中心部分が少しだけ体から飛び出している。それは、内から何かが外に出ようとしているかのように……。

今にもこの飛び出した部分から、何かが自分の体を食い破って出てくるような勢い。

少しずつ意識が薄まる。気を抜けば本当に気絶して倒れてしまいそうになる。

痛みが段々と激しくなる。呼吸は荒々しく、手足が痺れ、目は霞

む。

モゾ……。

変な音をたて、体の中の何かが動いた気がした。

「—————ッ！！」

体中にはしる”ひび”が一斉に疼く。

”ひび”は声帯まで届いているのか、どれだけ必死に叫んでも音にもならない奇っ怪な雑音しかでない。

こんな役立たずな喉なんていらぬ。引きちぎってやろうか。

手を伸ばし、指を喉に当てる。痺れが強く、喉をかく力すら残っていないかった。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いいたい痛いイタイ痛いイタイいた
イタイいたいたいいたいいたいイタイ痛いゐたいいたい———ッ！
！！

あまりの痛さに呼吸を忘れる。

苦しいくるしい苦シイ苦しいくるシイクルしい苦しい苦しい苦シイ
苦しいくるしいくるしいくるしい——ッ

あまりの苦しさに意識が刈り取られる。

何だろうか——

コの気持チハ——

どうシテコンナニ苦シイノ——

ドウシテ俺ガコンナ目にあワナイトいケナイの——

どうしてどうしてドウシテどうしてどうしてドウシテドウシテ

——ドウシテ!?

苦しみと憎しみと痛みで

自分が自分でなくなるような——

光ガ――

ホシイ……。

アカルイ――

光ガ……。。

……

秀二の意識は途切れた。
最後に見た光景は闇一色。

彼の最後に見たものは
絶望 か 死 か

この瞬間。定められた運命に一筋の亀裂が走る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8416h/>

アンリマユ -世界を穿つ悪魔-

2010年11月28日07時16分発行